**会議の概要**

|  |  |
| --- | --- |
| 名称 | 平成26年度　第３回神奈川県がん教育協議会 |
| 目的 | 神奈川県におけるがん教育を専門的技術的観点から協議する |
| 開催日時 | 平成27年１月21日（水）15時～17時 |
| 開催場所 | 横浜情報文化センター |
| （役職名）  出席者 | （◎：座長、○：副座長）  ◎中川恵一（東京大学医学部附属病院放射線科　准教授）  　片山佳代子（神奈川県立がんセンター臨床研究所　主任研究員）  　緒方真子（神奈川県立がんセンター患者会「コスモス」　世話人代表）  　角野禎子(公益社団法人神奈川県医師会　理事)  　奥山郁子（神奈川県学校保健連合会養護教諭部会　部会長）  　遠藤泰子（神奈川県ＰＴＡ協議会　執行役員）  　遠藤仁一（神奈川県教育委員会教育局支援部子ども教育支援課　課長）  　南雲正二（神奈川県県民局次世代育成部私学振興課　課長）  　　※代理：齊藤朋子（同課　教育指導主任）  　佐々木つぐ巳（神奈川県保健福祉局保健医療部がん対策課　課長）  ○田中不二夫（神奈川県教育委員会教育局指導部保健体育課　課長） |

【概要】

**１　開会**

**２　議題**

**（１）生徒全体アンケート結果（授業前後の変化）について（資料１）**

　　　事務局が資料１に基づき説明

（角野委員）

　「授業後」アンケートというのはどれくらい後のことか。

（事務局）

　３校のモデル授業実施校について「授業前」のアンケートは授業実施の１週間前から当日の朝までの間で実施していただいた。「授業後」については授業直後のホームルームで実施していただくよう統一した。

**（２）がん教育協議会委員アンケート結果について（資料２）**

　　　事務局が資料２に基づき説明

（中川座長）

　アンケート結果のＢとＣとの関係は考えさせられる。「がんの教育では、がんについての知識・理解を深めることを中心に行うべきと考える」「がんの教育では、いのちの大切さについて考えを深めることを中心に行うべきと考える」とどちらも中心となっているので回答が難しい。がんについての教育は必要で、それを通じていのちの大切さを学ぶということなのかなと思う。またがん教育を行う時期として、小学校が低く高校が高いというのも面白い。自由記載についても本当に参考となる意見で、ぜひこのデータを国にフィードバックできればと思う。

**（３）平成26年度版神奈川県パワーポイント補助資料について（資料３）**

　　　事務局が資料３に基づき説明

（中川座長）

　必要があれば追加でご意見をいただくこともできるが、かなり今年度の最終版に近いものになりつつあるので、できれば軽微な変更にとどめていただき修正については今回が最終ということもあるので座長一任としていただければ、誠実に取り入れ、判断させていただきたいと思う。その上で平成26年度版の神奈川県版スライド教材、指導用補助資料を完成させていただきたいと思う。

**（４）平成27年度の取組について（資料４）**

　　　事務局が資料４に基づき説明

（遠藤（仁）委員）

　資料に県内４地区と３政令市でモデル授業実施とあるが、横須賀市が入っていないのではないか。

（事務局）

　ご指摘の通り横須賀市は中核市だがこの資料の中では記載していない。横須賀市については事務局でも意識しているが個別の市町村名になってしまうので、とりあえずこの資料の中では記載していない。

（遠藤（仁）委員）

　５地区ではだめなのか。

（事務局）

　そうすると必ず横須賀市が実施しなければならないということになってしまうので、今のところ柔らかい表現にとどめている。今後、横須賀市より実施するというような回答がいただけた後には表現の仕方も変わってくる。

（片山委員）

　平成27年度の本格実施の中に一つ提案だが、先ほど事務局より説明のあった資料２の協議会委員アンケート結果の自由記載の中に「教員の研修・研究がどうしても必要である」とあり、これに賛同している。そこで、もし可能であれば平成27年度の本格実施の前に、例えば保健体育科の先生や養護教諭の先生のリテラシーの程度をある程度測っておくということは、今後がん教育が全国に広がるにあたっても先駆的な調査結果を提供できるのではないかと考える。どのような情報や知識が足りないのかということを予め知っておくことで、どこを補強してあげればいいのかということがわかるのではないかと思うがいかがか。

（中川座長）

　いい意見だと思う。教員の研修を行う前と後で先生方の知識や関心等がどう変わるかということは、少なくとも研修を行う時には必要だと思う。今片山先生がおっしゃっているのは研修に来られた先生だけでなく、全数調査に近いものができないかということでよいか。

（片山委員）

　その通りで全数調査となると協議会のお力がないとなかなか難しい。せっかく協議会が立ち上がっている神奈川県の田中課長や中川先生のお力を借りてできれば面白いのではないかと思う。

（田中副座長）

　できれば素晴らしいことだと思うし研修を行うにあたって資料にもなってくる。ただ教員の全数調査というものを今までやったことがあまりないので手段を考えてみたい。

（中川座長）

　県下の中学校は約何校くらいあるのか。また保健体育科の教員数はどれくらいか。

（田中副座長）

　約400校で、各校に２～３名ずつ保健体育の教員がいるとすると1,000人くらいではないか。

（中川座長）

　調査はやりたいと思うし意義もあると思う。現場の先生方はお忙しいので簡単に答えられるような体裁のものを片山先生にご用意いただいたとして調査は可能か。

（田中座長）

　もしやるとすると紙ベースで行う方式になると思うが、義務教育を担当している遠藤委員のご意見はどうか。

（遠藤（仁）委員）

　消極的で申し訳ないが今年度中は難しい。

（中川座長）

　今年度ではなく来年度に行えないか。また、1,000名が大変ならば無作為に抽出するという形で考えられないか。

（遠藤（仁）委員）

　例えば体育の各地区の代表者が集まる講習会等で実施するのはどうか。

（田中副座長）

　そうすると講習の内容にもよるが数十人程の限られたものになる。

（中川委員）

　予算も必要かもしれないし、場合によっては文部科学省の予算の中にそれを入れるというのは文部科学省もそのデータ望んでいるのでポイントは高くなると思う。

（田中副座長）

　アンケート用紙を学校に郵送し送り返してもらうという形になると思うが、それをやるには様々な機関との調整が必要で、関係機関との調整ができないとなかなかOKはもらえないと思う。

（中川座長）

　全数調査である必要はないし、無記名になると思うので紐付けして特定の個人がどう変わるかというのもとれないと思うが、どれくらいのｎ数が必要だろうか。

（片山委員）

　神奈川県の保健体育科の代表的な意見としてまとめるとすると、最低でも100は必要である。

（田中副座長）

　100ならば体育の教員が集まる教科研究会のような組織があるので、そういうところに依頼していくといったことができると思う。

（片山委員）

　がん教育の必要性を現場の先生が感じておられるのかもわからないし、がん教育を大学の教育課程の中で受けてもいないということになってくると、その知識を一体どこで得ようと考えているのかということも必ず必要になってくるので、まずはリテラシーを知らなければならないと思う。

（田中副座長）

　文部科学省もそのような資料がなければ進められないだろう。私の個人的な意見になるがぜひこの調査をやってみたいと思う。どういう方法でできるかということについてはお時間をいただいて検討したい。

（中川座長）

　緒方委員、他に何かご意見はないか。

（緒方委員）

　生徒のアンケート結果を見てがん教育がかなり影響を与えていると感じ、やりがいがあり感謝している。その中で体験者の話が重要だという声もあったが、今後学校ではどのようなフォローを考えているのか。実際体験者を募るのか。

（事務局）

　どのような形でやるかは各学校で決めていくことになるが、がん対策課としては教育の方々をフォローアップする意味で、緒方さん等の人脈をお借りして要望に対して答えられるような環境を作っていきたい。具体的にこうするといった構想はないが、体験者の方々のご意見を教育の中でしっかりと組み込んでいきたいという意見が出るのではないかと思うので、その際にはぜひご協力をお願いしたい。

（緒方委員）

　実際モデル授業にもがん体験者の方々がたくさん見学に来られて「自分たちの体験がこのように活かされるんだ」ということを実感しておられたので協力は得られると思う。

（中川座長）

　体験者の方が実際に子どもたちに会って話をするのがベストだが、県下400の学校全てに出向くのは難しい。例えば緒方さんや何人かの体験者の方にビデオメッセージのようにお話いただいて、それを一部の学校で使用するということについてはどのように思われるか。

（緒方委員）

　がんを経験した人が語れば誰でもいいというものではない。伝えることができる方、伝えるだけのメッセージを持った方がビデオメッセージという形で子どもたちに伝えることはとても良いと思う。

（中川座長）

　現実的にはそのようなことも考えないと授業の構成の中でがん体験者の話というのは保健体育の先生が大事にされるところだと思うが、なかなか現実的にはできないところでもあると思う。これを推進するということではないが、こういったことも考えていくしかないという気がする。

（緒方委員）

　今本当にがんになる方が多いので教員の中にもご自身が経験された方もいらっしゃると思う。そういう方に勇気を持って自分の体験を語ってもらうというのもすごくインパクトがあるのではないか。

（中川委員）

　今年度モデル授業の見学に来られたのは養護の先生が多かった。でも養護の先生は授業を持っているわけではないので、保健体育の先生とペアを組んで授業を行うという形も必要かも知れないが、奥山先生のご意見はいかがか。

（奥山委員）

　中学校は非常に時間割の組み方が難しい。学年一斉に行うような場合は養護教諭が入り込めるが、クラス毎となると厳しい部分がある。もちろん各学校の実情に合わせて協力できるところは協力できると思う。

（中川座長）

　各個別のクラスでやるのか全体でやるのか少なくとも２つの方法がある。仮に学校あるいは学年全体でやらない場合でも、保健体育の先生が比較的得意でない分野で、養護の先生がより経験や知識があるということであれば、ぜひそこは縁の下の力持ちになっていただき授業を支えていただきたい。

　PTAのお立場から何かご父兄からのご意見やネガティブな情報というのは出ていないか。

（遠藤（泰）委員）

　実際保護者はこのような教育が行われていることを知らないことがほとんどである。子どもがとてもいい授業を受けて帰ってきてその話を家では話したとしても、保護者がその内容を受け止められるかが心配だと感じる。保護者にも色々な方がいらっしゃるので、子どもたちが持ち帰った授業の内容を保護者がきちんと受け止める環境を作ることも大切だと思う。PTA協議会からも情報を発信していくことが課題だと考える。

（中川座長）

　がんは今までタブー視されてきたところが強いので、保護者の方の中から批判的な意見が出ることがあるが、保護者の方々とも仲良く進めていく環境を整えることが新しい事業を進める上で重要だと考える。

**４　その他**

　事務局より事務連絡

（中川委員）

　それでは今年度のがん教育協議会をこれで終わらせていただきたいと思うが、先ほどご説明いただいたように来年度もお目にかかることになろうかと思う。最後に座長として冒頭にも申し上げたが、本県のがん教育の取り組みは恐らく我が国のトップを走っているだろうという気がしている。それは皆さんの活発なご意見や事務局の努力のおかげである。また何度か申し上げているが保健福祉局と教育委員会が非常にいい関係で、両方が支え合っている。我々のがんの治療で言うと治療とケアで例えられるように、そのウェイトは徐々に変化するがどちらも必要であるという感じを強く受けた。ぜひこのことを全国の連絡協議会で伝えていただければと思う。皆様の様々なお力で本県のがん教育がこのように素晴らしく進んでいることを座長としても誇りに思っている。ありがとうございました。

**５　閉会**